



Paying Tribute to
Kaoru Chiba

千葉 馨「お別れの会」

2008年7月28日(月)12時

サントリーホール プルーローズ(小ホール)





Kaoru Chiba

Paying Tribute to

千葉馨小伝

文：岩野裕一

写真提供：NHK交響楽団、木之下晃



「楽隊屋仲間で、この人のことを「千葉さん」とか「馨君」なぞと呼ぶ人は一人もいない。いれば、そいつはもぐりだとされる。それほどに彼の愛称は楽壇マーケットに徹底して愛され親しまれている。その名は「パーチ」——これは、1959（昭和34）年1月に、NHK交響楽団の定期演奏会でモーツァルト〈ホルン協奏曲第3番〉のソリストをつとめた際の、プログラムの紹介文の書き出しである。

格調高いN響定期でも、こんな和やかなス

タイトルで紹介されるあたりがパーチのパーチたるゆえん。指揮者からも、音楽家仲間からも、聴衆からも愛された千葉さんの音楽人生を、駆け足で振り返ってみよう。

パーチこと千葉馨は、1928（昭和3）年3月6日、大分県別府に生まれた。両親ともに上野出身で、父は舞踏家でリズム教育者としても名を馳せた千葉躬春（ちば・みはる、躬治とも）。大分師範で教鞭を執るが、学校の講堂で破天荒な前衛舞踊——当時の人々は裸踊りと思ったらしい——を披露して辞職。一家は東京に移住する。ちなみに、幼稚園や学校でよく使われるカスターネット状の木製打楽器「ミハルス」は、父君の発明になるという。

馨少年は7歳からヴァイオリンの手ほどきを受けるが、「僕はヴァイオリンの音が結局高すぎて好きじゃなかったんだな。だからうまくなるわけではない」。だが、1940（昭和15）年に入学した法政中学でラッパ鼓隊の一員となり、アルト・ホルンと出会ったことで音楽に目覚める。

中学4年で東京音楽学校（東京芸術大学



の前身)を受験するが、筆記試験の「近松門左衛門について記せ」という問題に手こずって一行も答案を書けず、あえなく不合格となったエピソードは、ご本人の口から聞いた方も多いただろう。

翌年の試験は難なく合格したが、入学したのは戦争末期の45年4月。同級生には矢代秋雄、黛敏郎、松浦豊明、長松(長岡)純子といったそうそうたる面々が揃い、永田晴、岡田朗の両氏に師事したが、入学した年の8月に終戦を迎えて時代は急激に変化する。さっそくジャズの洗礼を受けた千葉さんは、ヴァイオリンやウクレレの経験を活かしてギタリストとなり、新橋のクラブで荒稼ぎしたという。そんなとき、「ジャズなんかやってないで、オーケス



トラに来ないか」と声をかけたのが、日響の名事務局長、有馬大五郎だった。かくして昭和21年7月、東京音楽学校の本科在学中に日本交響楽団(NHK交響楽団の前身)の研究員となり、卒業と同時に正団員となる。

1956(昭和31)年、「もはや戦後ではない」が流行語となったこの年の秋、千葉さんはドイツ、イギリスに留学する。このとき、伝説のホルン奏者デニス・ブレインに師事したことは周知の通りだ。デニス・ブレインと初めて会ったのは、フィルハーモニア管弦楽団がカラヤンとくばらの騎士)のレコーディング・セッションを行っているとき。2年前にN響に客演したカラヤンと親しげに話す様子に驚いたブレインは、それまで弟子をとったことがなかったにもかかわらず、千葉さんを懇切丁寧に指導したという。だが、いったんドイツに渡った

千葉さんがロンドンに戻った57年9月、ブレインは自動車事故で急死する。

その後、ドイツでグスタフ・ノイデカ、マックス・シュトルップに師事した千葉さんは、58年春に帰国。その後、1983(昭和58)年3月に55歳の定年で退団するまで、実に36年間にわたって、卓越した音楽性と抜群の存在感でN響ホルン・セクションを支えてきた。1966年にカラヤンからベルリン・フィルに招聘されながら断った話は有名だが、「ベルリンには新鮮でうめえ魚がないから」というのはマスコミ向けの理由で、「N響を離れるわけにはいかない」とカラヤンには返事をしたそうである。勤続35年を迎えた82年秋には、同団の発展に顕著な功績のあった人々に贈られる「第1回有馬賞」



photo:A.Kinoshita

を受賞した。

N響を退いたのちもオーケストラ・プレイヤーとしての活躍は続き、新日本フィルハーモニー交響楽団の楽友として、1983年6月から97年7月までステージに立った。この時期、同団への客演機会が多かった指揮者の朝比奈隆は、オーケストラの中に古武士パーチがいることをこのほか喜んだという。さらに、独奏者としても活躍する一方、長年にわたって教授をつとめた国立音楽大学をはじめ、母校の東京芸術大学、山形大学、日本大学などで後進を指導。東京ホルンクラブ代表、日本演奏連盟理事、アフィニス文化財団理事として楽壇の発展にも寄与した。1993(平成5)年には、第4回新日鉄音楽賞特別賞を受けている。

その後、病に倒れた千葉さんは、玲子夫人の献身的な看護で長きにわたる闘病生活をおくったのち、2008(平成20)年6月21日午前2時45分、永遠の眠りについた。享年80。

あの輝かしい音色の記憶とともに、パーチの名は永遠に語り継がれることだろう。合掌。

参考資料

『フィルハーモニー』1958年5月号、1959年1月号、同11月号、1981年11月号、『バイパス』第4号、『週刊朝日』1983年2月25日号、『音楽芸術』1994年3月号、藤沼朝保編『楽器が語る音楽の現場(2)』(1974年、ラジオ技術社)



追悼のメッセージ

千葉馨さんのご家族、ご友人の皆様へ

このたびは、親愛なる友人であり音楽家である千葉馨さんの訃報に接し、悲しみを覚えています。国際ホルン協会を代表して、心からお悔やみ申し上げます。

日本交響楽団、NHK交響楽団の首席ホルン奏者、新日本フィルハーモニー交響楽団の楽友であり、国立音楽大学教授、日本ホルン協会の重鎮でもあられた千葉さんは、日本中のホルン演奏の向上につとめられました。

彼が、1995年に山形における国際ホルン協会のワークショップを催されたのは、彼がホルンを国際的な見地から考えていたという証明になりました。それは、彼が若い頃に東京、デトモルト、フランクフルト、そしてロンドンでデニス・ブレインに師事した頃から培われてきたことです。さらにヤマハのコンサルタントとしての彼の役割は、世界中の多くの音楽機関、団体、音楽家個人に影響を及ぼしました。

また、彼は日本でも幅広く活動し、とくに日本音楽家ユニオンのアドバイザーとして、多くの音楽家にとってかけがえのない存在でした。音楽とホルン演奏に対するこれらの卓越した貢献によって、彼は日本人として最初に国際ホルン協会の最高位である名誉会員に選ばれたのです。そして、千葉さんがホルン演奏でもたらした影響力が、日本、アジアと世界中に広がったことは疑問の余地がありません。

真に偉大な指導者が亡くなったとき、悲しみはさまざまな形で現れ、われわれは言葉を失います。私たちは彼を失ったことを悲しむべきでしょうか？あるいは彼の素晴らしい人生を知り得たことに対して、喜びを覚えるべきでしょうか？おそらく、われわれは彼の栄誉を称えるために、双方の感情を持つべきでしょう。彼の不在は悲しむべきことですが、私たちは彼と同じように、喜びと、他者への思いやりをもって音楽を演奏しようではありませんか。

千葉馨さんは、彼の人生と生涯を賭けた音楽によって、この世界をよりよいものとしてくださいました。国際ホルン協会は、千葉さんのご家族とご友人に、心からのお悔やみを申し上げます。

2008年7月15日

国際ホルン協会会長

ジェフリー・スネデカー

御礼の言葉

本日は、ご多用中のところ「千葉馨「お別れの会」」にご参列を賜りまして、まことにありがとうございました。

日本のホルン界の第一人者であり、

オーケストラ界の先達としても多大な功績を残された千葉さんを偲び、

皆様のご芳志で盛大にお送りできましたことを、発起人一同心より感謝いたします。

本来ならば、皆様に拝眉のうえ御礼申し上げるべきところですが、

略儀ながらこの言葉をもって御礼のごあいさつとさせていただきます。

2008年7月28日

千葉馨「お別れの会」発起人一同

発起人

海野 義雄	岡部比呂男	北村 源三
霧生 吉秀	庄野 進	外山 雄三
豊嶋 泰嗣	中村 絃子	永田 徳
野島 直樹	浜中 浩一	堀 正文
松崎 裕	森 千二	守山 光三

世話人

井手 詩朗	加納 民夫	桑原 浩
松原千代繁	吉田 邦生	

(いづれも五十音順)